

アルケイアー記録・情報・歴史・歴史―

第一〇号 二〇一六年三月 一五―一六二頁

南山アーカイブズ

特集Ⅱ「展示を利用した自校史教育の可能性」

展示を利用した教育の可能性――博物館からの提言

黒澤 浩

南山大学人文学部人類文化学科

Possibilities of Museum Education in Exhibition Room

Department of Anthropology and Philosophy, Faculty of Humanities,
Nanzan University

KUROSAWA Hiroshi

Archeia: Documents, Information and History
No.10 March, 2016 pp.151-162
Nanzan Archives

- はじめに
- 一 博物館の位置付けと教育
 - 二 博物館の教育
 - 三 博物館教育の壁
 - 四 VTS (Visual Thinking Strategies)
 - 五 プログラムの構築
- おわりに

展示を利用した教育の可能性——博物館からの提言

黒澤 浩

はじめに

「南山アーカイブズの展示室が出来上がった。筆者は、その開室を記念したシンポジウムにおいて、博物館の立場から展示を利用した教育の在り方についての提言を求められたが、本稿はその内容をまとめたものである。もとより、アーカイブズと博物館とは共通する点もあるが、異なる点もまた少なくない。したがって、博物館からの提言がそのままアーカイブズでの展示利用につながるわけではない。しかし、展示について博物館は長い経験を有し、しかも展示を教育活動に上手くつなげられてこられなかったという経緯がある。

本稿では、そうした反省を踏まえ、展示を教育に利用する難しさとともに、最近、美術館を中心に広がりつつある鑑賞教育の手法を紹介し、展示を利用した教育の可能性を示してみたい。

一 博物館の位置付けと教育

博物館は教育機関である。このことは、われわれ博物館学を専門とする者には自明なことであるが、一般的認識ではないのかもしれない。博物館法の第二条には次のように記されている。

第二条①この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関：

この条文には言葉としての教育機関とはないかもしれないが、読めば博物館が教育に資するべき機関であることは明かであろう。さらに言えば、法律上の「博物館」である「登録博物館」あるいは「博物館相当施設」が各市町村の教育委員会の所管であることを考えれば、博物館とは学校と並ぶ教育機関であるといえるのである。

ところで「教育」という言葉には、大きく三つのカテゴリーが含まれている。一つは学校教育であり、二つ目は社会教育、そして三つ目は生涯教育である。博物館の場合、博物館法の上位法が社会教育法であることから、かつては社会教育機関という位置づけがなされていた。しかし、社会教育が学校教育の対となるカテゴリーであり、その範囲が比較的狭いことから、現在では生涯学習機関と位置づけられている⁽¹⁾。

博物館での教育活動と生涯学習とは親和性が高い。なぜならば博物館は、理論上、利用者を年齢や学歴、文化的背景などは一切問わないものだからである。このように言われる根拠は、博物館の教育実践が、文字ではなく「モノ」

によることを特色としていることにある。だが、モノを使った教育とは、実際問題として非常に難しい。なぜならば、学校・家庭を含め、だれもモノから有意な情報を引き出し、それを使って何事かを考える方法を教えてくれないからである。そればかりか、学校の教師や親たちも実はそのようなことは知らないと言つてよい。多くの人が博物館にあまり魅力を感じないのは、それだけではないにしても、こうした事情が大きく作用しているのである。

二 博物館の教育

博物館とは言うまでもなく、西欧の近代社会が生み出した政治的・文化的装置であり、制度である。したがって、博物館に関しては、ほとんどすべての点において、欧米の方が一歩も二歩も先を歩いている。博物館教育もまたそうである。

アメリカでは、一九八〇年前後からそれまでのキュレーター³⁾中心の博物館という考え方を変え、エデュケーター⁴⁾による教育プログラムを活動の軸とするようになったという。特に一九九二年に出されたアメリカ博物館協会（AAM）の『卓越と公平』という報告書で、利用者に対する公平なサービスとしての教育活動が提言されたことは、こうした方向性に大きな影響を与えたとされる。

イギリスでも一九九〇年代後半のブレア政権時代に、教育を重要な政策課題と位置づけたが、一九九九年に出されたD. アンダーソンによる『共通の富』においても、博物館は学習センターであり、教育・社会・経済、そして精神的な公共教育のための機関とされている。

このように、世界的に見ても博物館がかつてのような、宝物を崇め奉るテンプル（神殿）であるという感覚はも

はや通用しない状況なのである。

では、日本ではどうであろうか？

日本の博物館でも教育・普及活動は盛んにおこなわれている。その多くは、講座や講演会などの座学、ギャラリートークや展示解説などの説明が中心であり、それ以外では、体験学習やワークショップなども人気があるようだ。しかし、総じていえることは、日本の博物館の場合には、博物館が「教える」型のレクチャータイプが一般的だということである。そして、個々の博物館が良い企画を実践していても、それが理論的に深化されていないため、目的や方法も曖昧になり、実践の成果も共有化されていない。これは博物館側からの反省を込めたアドバイスとして受け取ってもらいたい。

三 博物館教育の壁

ニューヨーク近代美術館(MOMA)の教育部長だったフィリップ・ヤノウインは、自分たちの学習プログラムがどのくらい効果的であるのか、プログラムによって参加者はより多くの学びを得ているのか、ということを調べるために認知心理学者のアビゲイル・ハウゼンに調査を依頼した。ハウゼンは、MOMAで行われているレクチャーやギャラリートークといった対面型のプログラムでデータを収集した。以下は、ヤノウインの著書から引用である。

ハウゼンの調査により導き出された結論は驚くべきものだった。参加者はプログラムが提供している内容を、終了直後ですら記憶していないというのである(ヤノウイン二〇一五)。

この結果にMOMAのスタッフは大きな衝撃を受けたようだ。ヤノウイン自身も「敗北感を味わった」と述べている。この事例が示しているのは、ある知識を言葉によって伝達することは必ずしも効果的でないということである。山鳥重によれば、人が物事を「わかる」と感じるためには、過去の記憶や「自分の持っている何かほかの心像」に参照する過程が必要だという（山鳥二〇〇二）。言い換えれば、全く新しいことは説明されただけでは、理解して記憶にとどめることが困難だということである。このことは、「学びは能動的で、学習者の内面の再構成につながる」（黒岩二〇一五）というG・ハインのいう「構成主義」の教育理論とも関連付けられる。

ハインは教育理論を「解説的教育論」「刺激反応理論」「発見学習論」そして「構成主義」に分類したが（ハイン二〇一〇）、これに従うならば日本の博物館における教育プログラムは未だ前三者の域を出ていないということになる。そして、MOMAにおけるハウゼンの調査結果を参照すれば、これらのプログラムの効果ははなはだ怪しいと言える。

四 VTS (Visual Thinking Strategies)

MOMAに話を戻そう。この調査結果に衝撃を受けたヤノウインらはハウゼンと協力して、新たな教育プログラムの開発に向かう。その結果できたのがVisual Thinking Strategies、通称VTSと呼ばれるプログラムである。ここではVTSの方法について簡単に紹介しておく。詳細はヤノウインの著書を参照されたい。

まずVTSの重要な点は、「学習者が主体的に発見を積み重ねていけるように促す」ことだという（ヤノウイン二〇一五）。そして、その場合、教師や学芸員は「教える」のではなく、ディスカッションが展開するように促す

ファシリテーターに徹することが必要である。

次にVTSの手順を見ていこう。VTSの手順はシンプルである。ファシリテーターは慎重に選定された素材^③を使いながら次のように進めていく。

① 作品をよく見る ② 観察した物事について発言する ③ 意見の根拠を示す ④ 他の人の意見をよく聴いて考える ⑤ 話し合い、さまざまな解釈の可能性について考える (ヤノウイン二〇一五)

そして、この手順を実行するときにする質問はわずか三つである。

- ・この作品の中で、どんな出来事が起きているでしょうか？
- ・作品のどこからそう思いましたか？
- ・もつと発見はありますか？

以上の手順と質問によってVTSは進められていく。このときファシリテーターはディスカッションを促すために次の点に留意する必要がある。

① 指差し 学習者が言及している部分を指差すことで、ファシリテーターの理解が間違っていないことを確認すると同時に、他の学習者とも認識を共有する。

② パラフレーズ (言い換え) 言い換えをすることで、その発言をきちんと理解していることを発言者へ伝える。

③ リンク (発言をつなげる) 個々の意見がどのように影響し合っているかを示し、一見バラバラに思える発言でも話し合う意味があることを示す。賛成意見にリンクすれば他に同じ意見を持つ人がいることを示すことができ、反対意見にリンクすれば同じものを見ても異なる意見があることを示すことができる。

そして、終了時には自分がその日の対話から学んだことをコメントする。このとき「正解」を示す必要はない（「正解」があるかどうかもわからない）。

こうした一連のサイクルは、模式化するならば観察→推論→確かめというプロセスに対応する。大野照文によれば、このサイクルは研究者が研究する思考のサイクルと同じであるという（大野二〇〇八）。

このようなプロセスを経ることで、もしそれがすでに経験されたことであれば理解が深まるであろうし、もしそれが新しい未経験なことからであれば、観察→推論→確かめというサイクルの「経験」を経て、学習者の内面で「再構成」される可能性が高まるであろう。いずれにしても、VTSによって学びの定着が確実に促されているのである。

ところで、VTSは美術の分野で開発されたプログラムであり、今回のアーカイブズでの展示を利用した教育とは別であるという意見もあろう。しかし、アメリカではVTSが美術だけでなく様々な教科への応用が可能であることが知られ、実際に教育現場で応用されている。その範囲は言語学習、歴史、数学、理科とほぼ学校の教科全域にわたるものである（ヤノウイン二〇一五）。ここにVTSが多岐に互る専門分野をもつ博物館で実践可能とされる根拠がある。

ただし、VTSは万能ツールではない。今日、VTS先進国のアメリカでもその開発から三〇年近くが経ち、批判が噴出しているという。その詳細はまだ把握できていないが、筆者としてもVTSでは知識を軽視しているのではないかと感じられることと、正解がないことで学習者が不安になるのではないかと、という危惧をもっている。また、実践にあたっては学習者がどのような発言をするのか予測できないというリスクもある。もちろんファシリテーターは学習者に自由な発言を促していかなければならないが、不規則な発言によってプログラムの進行が妨げら

れる可能性はある。突き詰めて言えば、プログラムの成否はファシリテーターの資質に左右されるところが大きいということになりかねないのである。

五 プログラムの構築

VTSは確かに画期的な方法である。しかし、展示を教育に活用していくための唯一の方法であるというわけではない。学習の目的、もっている資料、学習者の特性、場の環境等の変数に応じてより適したプログラムを選択していくことが重要であろう。その際、注意しなければならぬのは、どのようなプログラムを構築するにしても、まずはその目的を明確にすること（何を伝えたいのか）、その目的を達成するのにふさわしい素材を選ぶこと、そして目的を達成するのに最も適した方法は何かを考えることである。何よりも、先に紹介した観察↓推論↓確かめというサイクルを担保しておくことが重要なのである。

おわりに

展示は、一回見たくらいでは、大した学習効果は期待できない。展示を使った学習は、長期的に、かつ継続的におこなわれる必要がある。子供だけでなく大人も含めて、長期的に展示に親しむためには展示の場での体験が大きく影響する。博物館でのこうした体験を、アメリカのフォークとデイアーキングは「ふれあい体験モデル（相互作用による体験モデルともいう）」として概念化した（フォーク、デイアーキング一九九六）。これは博物館利用者が

博物館へ行くと決めた時点から家に帰るまでの体験をトータルとして捉えたものである。展示を使った教育が実を結ぶのは、このような体験を踏まえて、その体験を繰り返し返そうという動機が生まれたときである。

日本の博物館や美術館では、何か暗黙の了解として、展示室では静かにしていなければいけないような雰囲気がある。ある美術館では、女性のハイヒールの靴音がうるさいというクレームがあったそうである。一方で、自然史系の博物館に行くと、子供たちが好奇心にあふれたまなざしで展示室を駆け巡っている。「体験モデル」として見たときに、どちらが良い体験になるであろうか。

われわれは、教育・学習プログラムを考える前提として、まずは繰り返し展示を見てもらい、繰り返し展示に足を運んでもらうための戦略を考えることが必要である。プログラムを考えても、学習者・参加者がいなければ意味がない。そして、そのためには、せっかく作った展示を、言葉は悪いかもしれないが、「使い倒す」ことを心がけなければならない。

これが、博物館の立場からのアーカイブズへの提言である。

註

(1) 生涯教育ではなく生涯学習と呼ぶことが一般的である。その違いは生涯教育が実施者側に立った言い方であるのに対し、生涯学習は受益者・利用者側の言い方である点にある。博物館では近年、利用者主体の博物館という考え方が主流となってきたため、本稿でも生涯学習の語を採る。

(2) 「理論上」としたのは、実際には博物館利用には大きな障壁があるからである。例えば、視覚に障害のある人たちは実質的に博物館を利用できないし、日本語を解さない外国人も同じである。博物館は現実には、意識的か無意識的かは別にして、利用者を「選別」しているのである。

- (3) 「学芸員」はキュレーターの訳語だという意見もあるが、それは大きな誤解である。日本の学芸員は博物館運営に関する最低限の能力を有することが求められ、その地位も最も一般的な公立博物館の学芸員の場合には地方公務員であるが、アメリカのキュレーターの社会的地位は驚くほど高い。学芸員とキュレーターは全く次元が違うものである。
- (4) エデュケーターは教育担当者ということになり、日本でも

〔参考文献〕

- 大野照文二〇〇八「大学博物館における社会連携——京都大学総合博物館を例に」『化石』八三 日本古生物学会
- 黒岩啓子二〇一五「博物館教育の実践に役立つ理論」『博物館教育論』講談社
- 山鳥重二〇〇二『わかる』とはどういうことか——認識の脳科学』ちくま新書
- G. ハイン（鷹野光行監訳）二〇一〇『博物館で学ぶ』同成社
- J. フォーク、L. デイアーキング（高橋順一訳）一九九六『博物館体験 学芸員のための視点』雄山閣
- P. ヤノウイン（京都造形芸術大学アート・コミュニケーションセンター訳）二〇一五『どこからそう思う？ 学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』淡交社

少しづつ認知されてきているが、博物館の主要なスタッフであるという認識には程遠い。

(5) VTSは美術教育として開発されたもので、事例として美術作品を前提としている。